

河内晩柑の果実外観向上のための栽培管理技術

黒点病、小黒点病、炭疽病（さび果症）は、幼果期から秋期まで降雨によって感染するため防除を徹底する。また、炭疽病（さび果症）は7月に袋がけを行うことで軽減できる。

農業研究センター天草研究所（担当者：古川珠子）

研究のねらい

河内晩柑は黒点病、小黒点病、炭疽病（さび果症）によって、果実表面が汚染され、果実外観の不良により商品価値が著しく落ちてしまう。このため、枯枝の剪除や袋かけとともに黒点病の要防除水準に基づく防除による被害軽減技術を確立する。

研究の成果

1. 伝染源となる枯枝は、梅雨時期に増加し、防除区では無防除区に比べて約2割発生が少ない（図1）。
2. 黒点病は、7月から10月頃まで発生が多い。また、小黒点病は、8月頃から発生が見られ11月以降に急激に増加する。炭疽病（さび果症）は、7月頃から感染し秋期以降に発生ピークとなる。いずれの病害も適期に薬剤を散布することで発生が少なくなる。また、枯枝除去も有効である（図2、3、4）。
3. 黒点病要防除水準に基づいた防除と7月までの袋かけにより炭疽病（さび果）の発生は減少する（図5）。
4. 以上のことから、黒点病、小黒点病、炭疽病（さび果症）は、梅雨時期以降から発生が多くなるため適期防除を徹底する。また、枯枝の除去により病害の発生を軽減できる。炭疽病（さび果症）は、日当たりのよい果実の陽光面で発生が多いため、その果実に7月から袋がけを行うことで発生を軽減できる。

普及上の留意点

1. 炭疽病（さび果症）は幼果期から感染するが、被害は秋期になって認められるため予防散布に努める。また、雨媒伝染性の病害であるため、気象条件にあわせた防除を徹底する。なお、袋かけを行う際は雨水からの感染予防のため、袋の閉じ口から水が入らないようにする。
2. 枯枝の発生や薬剤の散布ムラをなくすため、枝の過密を防ぎ通風採光のよい園地となるように努める。

【具体的データ】

No.337 (平成19年7月) 分類コード02-09 熊本県農林水産部

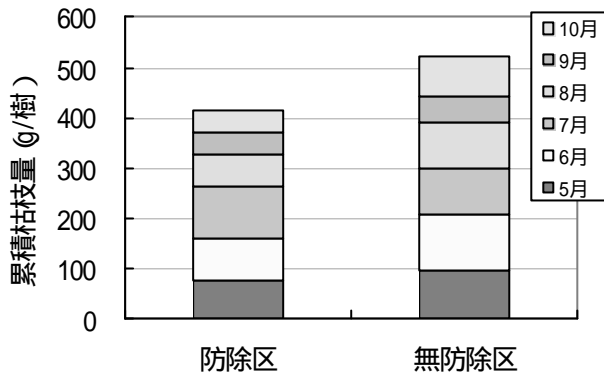


図1 防除と枯枝発生の関係 (2003年)

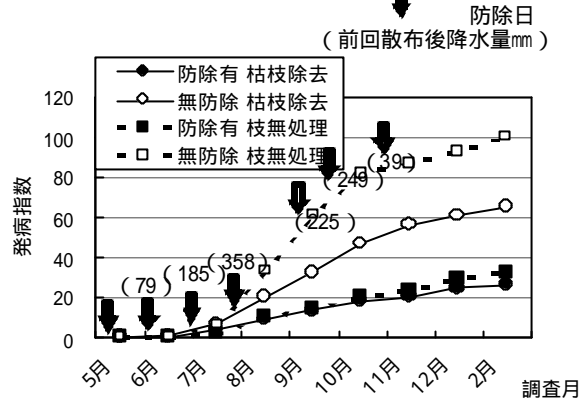


図2 防除と枯枝処理の違いによる黒点病の発生

(2003年)

注) 図2, 3の発病指数は1cm²あたりの病斑数を月毎に調査し、累計したものに無防除/枝無処理の2月を100としたときの指数を求めた。図4の発病指数も同様に、発病果数を累計し無防除の1月を100とした指数を求めた

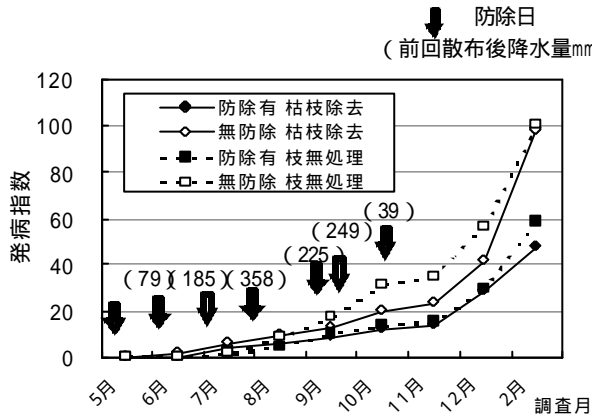


図3 防除と枯枝処理の違いによる小黒点病の発生 (2003年)

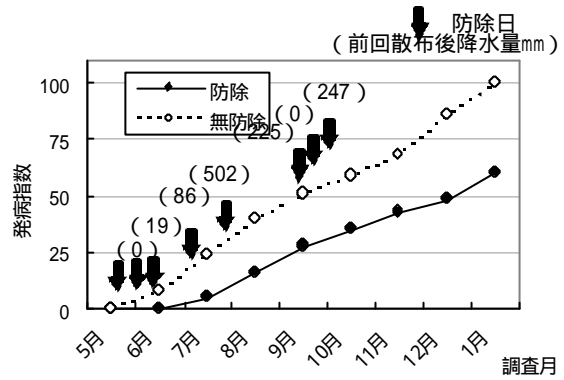


図4 防除の有無と炭疽病の発生 (2005年)

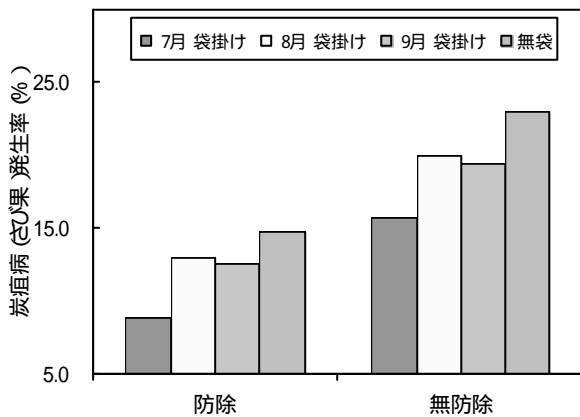


図5 防除と袋掛け時期の違いによる炭疽病の発生 (2005年)

(参考) カンキツ黒点病の要防除水準: 累積降水量200~250mm及び前回散布からの経過日数25~30日